

線の標本

—オブジェとしての線を収集し、
線の標本からイメージを広げよう—

増田優子（紀の川市立上名手小学校）



線の標本箱を見せ合う児童たち
した「かたち」と「イメージ」をめぐる多様な活
動が生まれることを企図する。

題材コンセプト

「線」は幾何学的には二次元とされるが、私たちが日常的に「線」は、いつもその物質感や手触りとともに現れる。本題材はこのような「オブジェとしての線」の魅力をベースに、昆虫採集と博物館学の方法を参照して、楽しみながら線からのイメージ生成を行う。また、線を標本化し、並べていく過程で、見ること（視覚的活動）と、命名したり互いに関連づけること（言語的活動）の二方向から、線を基に



児童作品 「お気に入りの線コレクション」

1. 題材について [題材観]

毛糸や草の茎、ひび割れや葉脈。子どもの周りには「線のオブジェ」がいくらかでもある。先ずそれらを探索し、あたかも昆虫採集—それは自然との象徴交換的なコミュニケーションであろう—をするような気持ちで採集する。その過程で線の多様な姿とその魅力に興味を持つことが期待される。

採集された線を標本化し、並べる。博物館での展示物で「モノ自身が語る」ことが重要なように、ここでは標本箱に入れられた線が、そのオブジェとして発する魅力を感じ取ることが大切であろう。そのために区切られた「箱」や、周囲から区別される「台」などの装置が必要になる。これらは博物学と博物館に起源を持つ手法であるが、オブジェと言葉との関係や、物体やイメージを意味論的に探求したコンセプチュアル・アートにおいて—ある意味ではシュルレアリスムでも—多く援用されている。美術（図工）の方法として今後も活かされるべきものであろう。ここでは、発泡スチロールの板（12mm厚）を70mm×70mmにカットした「台」を用意した。その後の並べ替えや操作の便を考えて、「箱」状の標本形式よりより自在な扱いが可能である。



台に自分のマークを書く児童

次のステップは標本相互の関係性への注目である。線を分類したり、秩序づけたりする活動は、標本を並べ替える具体的な作業によって可能になる。それはひとつひとつの線の意味が変容することであり、標本群が示す価値や文脈が再布置化されて、新たなものが生み出される作業でもある。

ある意味でこれはあらゆる教科に普遍的な活動であるが、図工科では芸術教育としての価値・活動として以下の3点を中心に捉えている。

- ① これらの活動が具体的なオブジェを操作するという美術方法に基礎づけられていること、
- ② 線という造形要素からはじまるイメージ(かたち)生成の活動であること、
- ③ オブジェ・イメージ・言葉の三者を往還する創造的活動であること。

2. 学習目標

- (1) 線のオブジェを楽しんで採集し、線の多様な魅力に気づく。[興味・関心]
- (2) 線のオブジェを工夫して標本化し、様々な並べ方を試みてイメージを広げる。[発想・構想]
- (3) 線のオブジェの魅力を生かした標本を作る。
[創造的技能]

- (4) 標本を工夫して並べる協同的活動を通して、かたちやイメージを想像したり、言葉にする。[鑑賞]

3. 学習の流れ・指導計画

学習活動は大きく三次の段階で展開する。それぞれの段階の概要を以下に示す。

■第一次：線を探し、採集する。

線を探すためには「線として見る」ことが必要である。糸や輪ゴム、植物の茎や枝など、存在として「線性」が強いものにせよ、世界を積極的に見る活動が必要だ。地面のひび割れ、布の織や縫い目、モノの境界線などは、より繊細で注意深い「探索」が求められる。子どもが草むらで細心に虫を探す時にも似た、全身の感覚で世界に向っていくことを求めている。

■第二次：線を集め、標本化し、並べる。

採集された「線」は箱に入れられ、日常や環境から切り離され、標本化されることで「オブジェ」となる。オブジェとして、その物体の多面的な魅力を発見することが先ず求められる活動である。だが同時に、標本化された線は、他の線との関係性を持ち始め、並べたり、名付けたりラベルを貼ることで、多様な構造化の試みが可能になる。標本化するための方法については、博物学的な諸方法を活かすとともに、自在に並べ替えが可能な道具だてを考えた。



種類の異なる線を1人36種類収集させた

■第三次：標準化した線を並べ替えて鑑賞し、再構成したりして造形遊びを行う。

線の物体としての魅力を基礎としながら、視覚的な観察と、知的（言語的）な分析や構造化によって、この標準箱は様々にかたちを変えるだろう。能動的な鑑賞活動を通じて、友だちの標本と思いがけない関係性が生まれたり、クラス全員の標本が大きな広がりを見せることも可能であろう。

4. 指導のポイント・学びのフォーカス

○児童の日常生活から具体物である線を多様に見つける導入として、まずクラスみんなで校庭に飛び出し、線を見つける探検（線の名探偵！）をさせた。自然物を中心に見つけた線をお互いに楽しんで集めることができた。ここでの楽しい体験が、家で線を収集するモチベーションにつながった。



校庭で線を見つけたよ！はさみでチョッキン！

○線を多様にコレクションし、標準化していく過程を楽しませるために、箱を用意しておく必要がある。

今回は発砲スチロール片を用いた台を使用した。発砲スチロールの台に線を標準化するにあたっては「発砲スチロール用接着剤」が有効であった。台に線をつける難しい技術もいらず、速乾性で接着時間も短縮でき、スムーズな標本活動につながった。また、台が適当な大きさの立体であるので、児童にとって操作しやすかった。後に鑑賞活動を行うことも考え、操作しやすく、展示しやすい台の大きさを見当し、使用した。



接着剤は、すぐくっついて簡単だ！

5. 鑑賞と批評

校庭で線を見つける初期の段階では、圧倒的に自然物の枝や茎といった線性の高いものを収集する児童が多かった。しかし、第1次の授業後半になると、葉脈、枝の太さや質感に着目したり、人工物ならではの線などに興味に移っていった。「線が家にもあるかな？」と聞くと「ある！ある！」と大盛り上がり。スパゲッティや千切り大根、レタスのスジなどといった児童にとって身近な線を、多様に収集できた。このとき、カードゲームや昆虫採集などに見られるような“コレクションする”という活動自体

を楽しむ児童の姿がとても印象的だった。

鑑賞では、自分のコレクションを並べた標本箱を見せ合った。気になる線を見つけては、対話し、並べ直したり、自分の線と友だちの線を並べて楽しむ姿が見られた。

また、おもしろい線を2つほど選び「線のお話」を作らせた。例えば、色の異なる輪ゴムを選び、お話を作った児童は「ぼくは肌の色は白いけれど、プールに入って日焼けしたよ。」といったように表現していた。白っぽい色の輪ゴムと焦げ茶色の輪ゴムを選んでこの話を作ったのだが、何とも生々しい表現だと感じた。具象物としての線を収集することによって、その線のイメージはよりリアルなものとなって表現されていた。他にも黄色のストローを選んで、「雷がドーンとおちてきたよ。」と表現したものもあり、線の色と形、質感、またそこから生まれるイメージを児童たちは五感も使って様々に取り入れ、言語表現していくのだと思った。



線をいろいろな角度から見ている児童



どの線にしようかな～



おもしろいお話ができたかも！

完成した児童の標本箱を改めて見ると、枝や毛糸といった線性の高いものを採集した児童が多かった。線に見えるものを台にディスプレイする児童は少なかったため、今後の課題である。また、学習の対象者が小学校中・高学年や中学生となると、線の標本箱としての学習も、発達に応じた広がりを持つてくる題材であると考えられる。